

『五百頌般若経』について

—試訳(承前)¹ —

藤田祥道

[§ 10]² スプーティよ、もし菩薩が色について、【1】まさしく有る^aとか、【2】まさしくそのように有る^bとか、【3】全く無い^cと観るなら、〔彼は〕真実を知らない^d菩薩であると知るべきである。… スプーティよ、もし菩薩が[D.109b]色について、【1】有ではない^e、【2】そのように有るのではない^f、【3】有でもなく無でもない^gと正観するならば、〔彼は〕真実を知る菩薩と言われる。…

(a)yod pa nyid, sad eva. (b)de bzhin du yod pa nyid, tathāsat eva. (c)med pa nyid, asad eva. (d)de kho na mi shes pa, atattvajñā. (e)yod pa ma yin pa, nāsat. (f)de bzhin du yod pa ma yin pa, na tathāsat. (g)yod pa yang ma yin med pa yang ma yin pa, na san na cāsat

¹本稿は先に発表した「『五百頌般若経』について—その瑜伽行派的傾向の指摘と試訳—」『仏教学研究』51,1995.3,pp.1-19(以下前稿と略す)の続編であり、前稿に引き続いて『五百頌般若経』(Pañcaśatikā Prajñāpāramitā)の試訳を掲載する。使用した略号等については前稿と同様である。なお、この場を借りて前稿の誤記を訂正したい。

p.11注(11): p.145a6-8 → P.145a6-8.

p.14.18-19: rūpaṇalakṣaṇam → rūpaṇālakṣaṇam

p.18注(13): § 11 の記述 → § 13 の記述

²前稿p.5でも指摘したように、本節は§ 2に説かれた【1】非存在、【2】惡存在、【3】實存在の三分に関連する記述であり、これらの三分を順次【1】有ではない(nāsat)、【2】そのように有るのではない(na tathāsat)、【3】有でもなく無でもない(na san na cāsat)と正しく観する者が真実を知る菩薩とされる。これに近い瑜伽論書の表現としては、前稿p.11注(9)に指摘したMA V,III.3cd をまず挙げることが出来よう。

『五百頌般若經』について(藤田)

[§11]スブーティよ、菩薩が色について心を等持しようとして^a色を勝解する³場合、色に対してその心が動き^b動搖し^c動乱する^dならば、〔彼は〕勝解の劣った^e菩薩であると知るべきである[P.149a]。…

スブーティよ、菩薩が色について心を等持させようとしてその心が色を勝解する場合、色に対して心が縛られず^f拘束されず^g束縛されない^hならば、〔彼は〕勝解に長けたⁱ菩薩であると知るべきである。

(a)sems mnyam par gzhag par 'dod, 欲住平等界中!, samādhātukāma. (b)skyod. (c)kun tu skyod. (d)rnam par skyod. (e)mos pa ngan pa, hinādhimuktika. (f)mi 'dogs. (g)kun tu mi 'dogs. (h)rnam par mi 'dogs. (i)mos pa bzang po.

[§12]1.スブーティよ、菩薩が色について無相法^aを遍知し、苦を静め、涅槃に対してひたむきになるために行ずる^bならば、正しく趣入している^cと知るべきである。このように正しく趣入した菩薩はすみやかに無上[D.110a]正等覚をさとるであろう。…

無相を知り、苦を鎮め、寂靜にひたむきとなるべし。〔そうすれば〕菩薩は
〔さとりを〕成就する^{d4}。(第1偈)

³「勝解、信解」(mos pa,adhimukti/adhimokṣa)の語は、この場合特殊な意味を持ち、瞑想において例えば骨鎖などの瞑想対象の形象を再現すること(Vorstellung reproduzieren)、心中に形象をありありと思い浮かべる(Vorstellung vergegenwärtigen)あるいは映像化する(visualisieren)ある特定の方法を意味し(L.Schmithausen,Versenkungspraxis und erlösende Erfahrung in der Śrāvakahūmi,Epiphanie des Heils,1982,p.65(f.n.33))、心中に映像化された形象の消去(Löschen)を意味する「除遣」(vibhāvanā)と対比して用いられる(ibid.,p.67(f.n.45a))。勝解・除遣は特に『瑜伽論』やS N S, VIII章といった瑜伽論書の修道論の文脈に出る重要な術語である。特にS N Sにおいては唯識真如(vijñaptitathatā)を作意することによって瞑想対象の形相(nimitta)を除遣すると説かれるように(VIII. § 26-28)、除遣という瞑想時のテクニックが唯識観と密接に関連することが明言される(cf.拙稿「教法にもとづく止観」『仏教学研究』48,1992,p.49)。これに対してP S, § 12.4, § 15に見られる除遣に関する記述では唯識観とは関連づけられていない。特に§ 15の記述からすると、P Sは『摸大乗論』などに見られる唯識説を知悉するばかりかそれを利用しながら、あえて唯識の語を用いることを避けているらしく見られ、P Sと瑜伽行派(の諸典籍)との距離を窺わせる例として興味深いが、この点については下記訳注(18)を参照。なお、「勝解、信解」の語義については、上記Schmithausen論文の他に、櫻部建「勝解 adhimukti について」『佛教語の研究』文栄堂,1975,pp.34-39、袴谷憲昭「如來說と唯識説における信の構造」『佛教思想11 信』平楽寺書店,1992,pp.199-229を参照。

⁴ § 12に説かれる五つの偈頌は悟りに至る修習の内容を述べたものであり、いづれも明白な説き方ではないものの、非存在・悪存在・実存在の三分を念頭に置いたものであろう。この第一偈に関していえば、「無相を知り」が法の非存在の部分を、「苦を鎮め」が悪存在の部分を、「寂靜にひたむきとなる」が実存在の部分をそ

インド学チベット学研究 1

2. スプーティよ、菩薩が色について顕わでない^e [法] と、あまねく顕わなる^f [法] と、それに安住する^g [法] とそれに悟入する法^h 【P.149b】を如実に知るならば、無上正等覚をさとるであろう。…

顕わでない [法] と、あまねく顕わなる [法] と、それに安住する [法] と悟入する法とを知って、〔菩薩は〕悟りを得るであろうⁱ。(第2偈)

3. スプーティよ、菩薩が色について色を探求する^jとき、それを認識しない^kで、色が顕わとならず^l、色の法性^mが洞察されるⁿなら、〔彼は〕すみやかに無上正等覚をさとるであろう。…[D.110b]…

探求するとき法を認識しないで、心に事物^oとして顕わにせず、法性を善く知る智者^pは、悟りを得るであろう^q5 (第3偈)

4. スプーティよ、色について非存在^rを知る菩薩は、色を除滅することを備えて、色の法界から搖るぐことなくすみやかに無上正等覚をさとるであろう。…[P.150a]…

非存在を知る知者は、除遣^sを備えて、法界から搖るぐことなく一切智者性^tを得るであろう^u6 (第4偈)

それぞれ指していると考えられる。瑜伽論書における近似の表現としては、順次、遍・依・円に対していわれる「遍知(parijñeya/parijñā)」・「斷(prahēya/ prahāna)」・「作証(sākṣat-karaṇīya/-kriyā)」が想起される(e.g. MAV,p.112.4-5. 椅谷憲昭「唯識説における法と法性」『駒澤大学佛教学部論集』5,1974,pp.(1)-(5) 参照)。なお無相(alakṣaṇa)が遍計所執性を指すことについては MAV,III.7a-c およびその散文釈を参照。

5 この部分の漢訳のテクストの混乱については、前稿 pp.3-4,p.11注(6)を参照。本箇所は §7 と同様に法無我観を法の非認識ということによって説く。ただしここでは「法の非認識」→「法の不顯現」→「法性の洞察」という観察のプロセスが説かれ、そしてそのプロセスは非存在・悪存在・実存在の三分と関連を有しているものと考えられる。前稿 p.4 で述べたように、§2 には、賢者は「非存在の法に執着せず」、「悪存在の法を引き起こさず」、「実存在の法を開顯する」ことによって大乗によって出離すると説かれていたが、同じ趣意をここでは別の説き方で述べているのである。比較すべき瑜伽論書の言説として、三性の一々への悟入を説く M S, III.9 を挙げたい。

6 引き続いて悟りに至るまでの修習を三分説に基づいて説いていると考えられ、内容的にも先の第三偈と関連し、したがって第三偈と対比することによって本偈の内容もより明らかに知ることができると考えられる。即ち、先に「法を認識しない」と説かれていたのがここでは「非存在を知る」と表現され、同様に「心に事物として顕わにせず」が「除遣を備えて」に、「法性を善く知る」が「法界から搖るぐことなく」と表現される。この様に対比することによって、法を認識しないということが三分の中の非存在を知ることを意味し、また心に法が事物として顯現しないということが除遣(vibhāvanā)の修習と関連することが知られる

『五百頌般若経』について（藤田）

5. スブーティよ、菩薩が色において、意味を欠いたもの^wと、意味がないもの^xと、
大いなる意味のもの^yとを如実に知るならば、〔彼は〕すみやかに無上正等覚をさとる
であろう。

意味を欠いたものと、意味がないものと、大いなる意味のものという〔三
つの〕意味のものとして〔諸法を〕知つて、諸菩薩は大いなるさとり
を得るであろう^{z7}（第5偈）

(a)mtshan nyid med pa'i chos, alakṣaṇadharma. (b)zhugs. (c)yang dag par zhugs pa.
(d)/ mtshan nyid med par shes bya dang // sdug bsngal zhi bar bya ba dang // zhi ba gcig
tu nges bya bar // byang chub sems dpa' sgrub par byed /, 若解無相法 諸苦自止息 衆相
皆寂靜 是菩薩所行。 (e)snang ba med pa. (f)kun tu snang ba. (g)de la gnas pa. (h)de
la 'jug pa'i chos (i)/ chos gang snang ba med pa dang // kun tu snang ba nyid dang ni //
de la gnas dang rab 'jug pa // de shes nas ni byang chub 'thob /, 若法闇與明 平等性如是
依止及解入 知已得菩提。 (j)yongs su tshol ba, paryesanā. (k)mi dmigs, nopalabhatte.
(l)mi snang bar byas. (m)chos nyid, dharmatā. (n)rab tu rtogs par byas. (o)vastu(cf.q).
(p)dhimat(cf.q). (q)/ rab tu btsal na mi dmigs chos // sems la dngos por mi snang ba //
chos nyid legs par shes pa yi // blo ldan byang chub 'thob par 'gyur /, 推求無異法 物境
無照心 智了於法性 此即得菩提。 (r)dngos po med pa, abhāva. (s)gzugs 'jig pa dang ldan.
(t)vibhāvanā(cf.v). (u)sarvajñatva(cf.v). (v)/ blo ldan dngos po med mkhas pa // rnam
par 'jig dang ldan gyur cing // chos kyi dbiyings las mi gYo bar // thams cad mkhyen pa
nyid 'thob 'gyur /, 智善解無性 修作悉具足 亦不動法界 即得一切智。 (w)don dang bral ba,
rahitārtha. (x)don med pa, anartha. (y)don chen po, mahārtha. (z)/ don bral ba dang don
med dang // don che ba yi don du ni // shes nas byang chub sems dpa' rnams // byang
chub chen po 'thob par 'gyur /, 無義無句義 大義亦復然 菩薩善了知 速得菩提果。

[§13]⁸ 1. スブーティよ、菩薩摩訶薩は色について【1】尋思することにもとづく貪
欲^aと【2】表示することにもとづく貪欲^bと【3】分別することにもとづく貪欲^cと【4】
貪欲^dと【5】大いなる貪欲^eとの[D.111a]五種の貪欲を遍知し、断ずるべきである。…

であろう。ここでは除遣ということが三分の中の悪存在に関して説かれていると考えられるが、初期瑜伽行派の三性説においても依他起性の除遣が円成実性に悟入するに際して必要とされる(e.g.『瑜伽論』授決辯分中菩薩地(T30,p.705b4-7;D.Zi 23b3-4;P.I 25b3-4)。この点については、阿理生「瑜伽行派の仏道体系の基軸をめぐって(2)」『伊原照蓮博士古稀記念論文集』,1991,pp.235ff.を参照。

⁷ 「意味を欠いたもの」「意味がないもの」「大いなる意味のもの」が順次、非存在・悪存在・実存在を指すことは明らかであろうが、その内容はよく理解し得ない。なお“don(artha)”をここでばかりに「意味」と和訳したが、もちろん英訳の「利益advantage」の理解も可能である(E.Conze,The Short Prajñāpāramitā Texts,p.113.1-7)。

⁸ § 13 では、色蘊などの一切法について、貪欲(rāga)、瞋恚(dvesa)、愚癡(moha)、慢(māna)、邪見(drṣṭi)、疑惑(saṃśaya)の六を遍知し、断すべき事を説く。これらの六を断することによって法の自性を認識しなくなり、ないし無上正等覚において出離するとされる。

インド学チベット学研究 1

⁹ スプーティよ、菩薩は色についてこれら五つの貪欲を断じてからは、色の自性^fを認識しない。[P.150b] 色の自性を認識しないことによって色を色として認識しない。色を色として認識しないことによって、色について色を認識するのである。〔しかし〕色について色を認識する者はすなわち色について色を認識しない者である。〔したがって〕彼は色の認識を認識しないというそのことによって、色をあらゆるあり方で超越し^g、無上正等覚において出離するのである。

2. スプーティよ、菩薩は色について【1】尋思し伺察することにもとづく瞋恚^hと【2】表示し伺察することにもとづく瞋恚ⁱと【3】分別し伺察することにもとづく瞋恚^jと【4】瞋恚^kと【5】大いなる瞋恚^lとの[D.111b]五つの瞋恚を遍知して断ずるべきである。…[P.151a]…スプーティよ、菩薩は色についてこれら五つの瞋恚を断じてからは、色の自性を認識しない。色の自性を認識しないことによって色を色として認識しない。

⁹以下のフレーズは§13の貪欲ないし疑惑に関する記述に共通しており、また§7の法無我観と内容的に関連するものである。まず藏漢訳を提示しよう。“/ rab 'byor byang chub sems dpas gzugs la 'dod chags lnga po 'di dag yongs su spangs nas / gzugs kyi rang bzhin mi dmigs so // [P.150b]gzugs kyi rang bzhin mi dmigs pas gzugs la gzugs su mi dmigs so // gzugs la gzugs su mi dmigs pas gzugs la gzugs dmigs 1) te / gang gzugs la gzugs dmigs pa de nyid gzugs la gzugs mi dmigs pa'o // de 2) gzugs (3 dmigs pa mi dmigs pa 3) des gzugs rnam pa thams cad du zil gyis mnan nas 'di lta ste / bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub tu nges par 'byung ngo /” (D.111a2-4; P.150a8-b2)

「須菩提。菩薩摩訥薩於諸色中若能捨離此五貪已。即於諸色自性無所得。若色自性無所得時。即色中色亦無所得。若色中色無所得時。即色中色而有所得。若色中色而有所得者。即彼色中色而無所得。由如是故。於諸色中若有所得若無所得。諸種類色而悉超越。即能出離成就阿耨多羅三藐三菩提果。」(T 8,p.858a18-24)

1) P.mi dmigs. 2) 受～識に関して再説する部分ではD. P.とともに“de nas”となっているが、瞋恚以下の記述はすべて“de”的読みを支持する。但し漢訳「由如是故」は“de nas”と対応するか。3) D. P.とともに“mi dmigs pa”であるが、受～識に関して再説する部分あるいは瞋恚以下の記述あるいは漢訳にもとづいて訂正する。

このフレーズの中で特に問題となるのは、「色の認識を認識しないということによって」と試訳した“gzugs dmigs pa mi dmigs pa des”的部分かと思われる。漢訳「於諸色中若有所得若無所得。諸種類色而悉超越」は色について認識すること(有所得)も認識しないこと(無所得)もどちらも超越するという意味であろうか。ちなみに英訳は次のように、筆者と同様の理解と考えられる。“When he does not apprehend the apprehension of that form, then, having transcended form in all ways, he is sure to win the supreme enlightenment.” (Conze,op.cit.,p.113.17-19)。したがってこのフレーズは、§7と同じく、色(の自性)の「非認識」にもとづいて得られた「認識」をさらに「認識しない」ことを説いているものと考えられる(cf.前稿pp.6-7)。

『五百頌般若經』について(藤田)

色を色として認識しないことによって、色について色を認識するのである。〔しかし〕色について色を認識する者はすなわち色において色を認識しない者である。〔したがって〕彼は色の認識を認識しないというそのことによって、色をあらゆるあり方で超越し、無上正等覚において出離するのである。…

3.スブーティよ、菩薩は色について【1】迷乱という愚癡^mと【2】迷乱の原因についての愚癡ⁿと【3】迷乱しない原因についての愚癡^oと【4】愚癡^pと【5】大いなる愚癡^qとの五つの愚癡を遍知して断ずるべきである。…[D.112a][P.151b]…スブーティよ、菩薩は色についてこれら五つの癡を断じてからは、色の自性を認識しない。色の自性を認識しないことによって色について色を認識するのである。〔しかし〕色について色を認識する者はすなわち色について色を認識しない者である。〔したがって〕彼は色の認識を認識しないというそのことによって、色をあらゆるあり方で超越し、無上正等覚において出離するのである。…

4.スブーティよ、菩薩は色について【1】多聞についての慢^rと【2】世俗的繁栄についての慢^sと【3】高慢^tと【4】慢^uと【5】大いなる慢^vとの五つの慢を遍知して断ずるべきである。…[D.112b][P.152a]…スブーティよ、菩薩は色についてこれら五つの慢を断じてからは、色の自性を認識しない。色の自性を認識しないことによって色を色として認識しない。色を色として認識しないことによって色において色を認識するのである。〔しかし〕色について色を認識する者はすなわち色について色を認識しない者である¹⁰。〔したがって〕彼は色の認識を認識しないというそのことによって、色をあらゆるあり方で超越し、無上正等覚において出離するのである。…

5.スブーティよ、菩薩は色について【1】自性を倒錯する邪見^wと【2】“有り”と考える邪見^xと【3】損減する邪見^yと【4】邪見^zと【5】大いなる邪見^{a'}との[P.152b]五

¹⁰ P.152a3 “mi dmigs so /” をD.112b2その他によって “mi dmigs pa'o /” に訂正する。

インド学チベット学研究 1

つの邪見を遍知して断じる[D.113a] べきである。…¹¹ スブーティよ、菩薩は色についてこれら五つの邪見を断じてからは、色の自性を認識しない。色の自性を認識しないことによって色を色として認識しない。色を色として認識しないことによって色について色を認識するのである。〔しかし〕 色について色を認識する者はすなわち色について色を認識しない者である。〔したがって〕 彼は色の認識を認識しないというそのことによって、色をあらゆるあり方で超越し、無上正等覚において出離するのである。…

6. スブーティよ、菩薩は色について¹²、【1】法についての疑惑^b’と【2】趣と苦についての疑惑^c’と【3】涅槃と仏・菩薩についての疑惑^d’と【4】疑惑^e’と【5】大いなる疑惑^f’との五つの疑惑を遍知して断じるべきである。…[P.153a][D.113b]…スブーティよ、菩薩は色についてこれら五つの疑惑を断じてからは、色の自性を認識しない。色の自性を認識しないことによって色を色として認識しない。色を色として認識しないことによって色について色を認識するのである。〔しかし〕 色について色を認識する者はすなわち色について色を認識しない者である。〔したがって〕 彼は色の認識を認識しないというそのことによって、色をあらゆるあり方で超越し、無上正等覚において出離するのである。…

(a) rnam par rtog pa'i 'dod chags, 尋求貪, vitarkarāga. (b) rab tu rtog pa'i 'dod chags, 遍尋求貪, prarūpanārāga. (c) rnam par rtog pa'i 'dod chags, 分別貪, vikalparāga. (d) 'dod chags, 貪, rāga. (e) 'dod chags chen po, 大貪, mahārāga. (f) gzugs kyi rang bzhin, rūpa-svabhāva. (g) zil gyis mnan nas, abhibhūya. (h) rnam par rtog pa dang rnam par dpyod pa'i zhe sdang, 尋伺瞋, vitarkavicāradvesa. (i) rab tu rtog pa dang rnam par dpyod pa'i zhe sdang, 遍尋伺瞋, prarūpanāvicāradvesa. (j) rnam par rtog pa dang rnam par dpyod pa'i zhe sdang, 分別伺瞋, vikalpavicāradvesa. (k) zhe sdang, 瞋, dvesa. (l) zhe sdang chen po, 大瞋, mahādvesa. (m) 'khrul pa'i gti mug, 動亂癡, bhrāntimoha. (n) 'khrul pa'i rgyu'i gti mug, 動亂相癡, bhrāntinimittamoha. (o) mi 'khrul pa'i rgyu'i gti mug, 無動亂相癡, abhrāntinimittamoha. (p) gti mug, 癡, moha. (q) gti mug chen po, 大癡, mahāmoha. (r) mang du thos pa'i nga rgyal, 多聞慢, bahuśrutamāna. (s) mnong par mtho ba'i nga rgyal, 高勝慢, abhyudayamāna. (t) mnong pa'i nga rgyal, 増上慢, abhimāna. (u) nga rgyal, 慢, māna. (v) nga rgyal chen po, 大慢, mahāmāna. (w) rang bzhin la phyin ci log gi lta ba, 自性顛倒見, svabhāvaviparītadrṣṭi. (x) yod do snyam pa'i lta ba, 有見, astūtidrṣṭi. (y) skur pa 'debs pa'i lta ba, 謠謗見, apavādadrṣṭi. (z) lta ba, 見, drṣṭi. (a') lta ba chen po, 大見, mahādrṣṭi. (b') chos la yid gnyis za ba, 法疑, dharma-saṃśaya. (c') gro dang sdug bsngal la yid gnyis za ba, 諸趣苦疑, gatiduhkhasaṃśaya. (d') mya ngan las 'das pa dang sangs rgyas dang byang chub sens dpa' la yid gnyis za ba, 佛菩薩法寂靜疑, nirvāṇabuddhabodhisattvasaṃśaya. (e') yid

¹¹ D. P. ともに受～識に関して再説する部分が欠落する。漢訳(T 8,p.859a11-14)には存在する。

¹² D. P. “dang” を “la” に訂正する。

『五百頌般若経』について（藤田）

gnyis za ba, 疑, samśaya. (f')yid gnyis za ba chen po, 大疑, mahāsamśaya.

[§14] スブーティよ、菩薩が色を探求して色の法を説く^aとき¹³、色について身・口・意の行い^bを淨めて^c、その色をことばどうりに^d、所説のとうりに^e、言説されるとうりに^f探求し、説法する^g[P.153b]としよう。その場合¹⁴ [彼は] 身・口・意の行いを淨めるとき¹⁵、色について過失^hを探求する菩薩であると知るべきである。色について不正の法ⁱを語る菩薩であると知るべきである。色において身・口・意の行いを未だ淨めていない^j菩薩であると[D.114a]知るべきである。

[これに対して] スブーティよ、菩薩が色を探求して色の法を説くとき、色について身・口・意の行いを淨めて、その色をことばどうりにではなく^k、所説のとうりにではなく^l、言説されるとうりにではなく^m探求し、説法するとしよう。その場合 [彼は] 身・口・意の行いを淨めるとき、色について良く探求するⁿ菩薩であり、正しい口業をもって語る¹⁶ 菩薩であると知るべきである。その色について身・口・意の行いを淨めた菩薩であると知るべきである。…[P.154a][D.114b]…

(a)gzugs kyi chos ston, rūpa-dharmadeśanā. (b)las, karman. (c)yongs su sbyong zhing. (d)ji ltar brjod pa. (e)ji ltar bstan pa. (f)ji ltar bsnyad pa bzhin du. (g)chos bston, dharmam deśayati. (h)nyes pa, dosa. (i)dam pa'i chos ma yin pa, asaddharma. (j)yongs su ma dag pa, apariśuddha. (k)ji ltar brjod pa bzhin du ma yin. (l)ji ltar bstan pa bzhin du ma yin. (m)ji ltar bsnyad pa bzhin du ma yin par. (n)legs par tshol ba.

[§15] スブーティよ、菩薩が色について心を等持しようとして^a、その色を [心の] 内に勝解するとき、色について勝解対象としての色^bと勝解されたものとしての色^cと

¹³D. “pa”であるが、P.の読み“la”を採用する。

¹⁴P. “chos ston la”であるが、D.の読み“chos ston te / de la”に従う。

¹⁵D. P.ともに“yongs su sbyong pa”であるが、受～識に関する再説部分のD. P.の読み“yongs su sbyong na”を採用する。

¹⁶D. P.とも“yang dag pa'i ngag gi las kyi gtam can”であるが、太字部を“kyis”に訂正する。

インド学チベット学研究 1

の二が認識されることになる¹⁷。その場合、菩薩が勝解されたものとしての色について勝解対象のごとくに説いたり、あるいは勝解対象〔としての色〕について勝解されたもののごとくに説くならば、〔彼は〕 色について誤って説く^d菩薩であると知るべきである。

それはなぜか。スブーティよ、勝解対象としての色とは別に勝解されたものとしての色の特相^eは無いからである。スブーティよ、もし勝解対象としての色とは別に勝解されたものとしての色の特相が有るならば¹⁸、(1) [ある同一の] 勝解対象について、

¹⁷ §15は三昧における諸法の観察を、訳註(3)で触れた「勝解(adhimukti)と除遣(vibhāvanā)」という瞑想に関する特殊な概念を用いて説いている。PŚはまず「勝解」という行為において、「勝解対象としての色(mos par bya ba'i gzugs,adhimoktavya-rūpa)」と「勝解されたものとしての色(mos pa'i gzugs,adhimuktirūpa)」の二つを考える。この二つは瑜伽行派の文献中に「本質(ほんぜつ,bimba)と影像(pratibimba)」とも「本来的なもの(prākṛta)と影像(pratibimba)」とも表現されるもので、例えば壺を瞑想対象とする場合では、順次、外界に存在するものとして認識される本体としての壺と心中に映し出された壺を指す(「本質・影像」の語については、長尾雅人『撰大乘論 和訳と注解 上』講談社,1982,p.293を、「本来的なもの・影像」の語については、拙稿[1992],pp.62-63を参照)。この二つの色について、まず勝解対象としての色に関する想念(samjñā)を除遣し、さらに勝解されたものとしての色に関する想念も除遣することによって、あらゆる色を認識せず、乃至無上正等覚をさとることを説くというのが本節の大筋である。ここでPŚが説く「勝解対象としての色に関する想念の除遣→勝解されたものとしての色に関する想念の除遣」という除遣の過程は、瑜伽論書中に説かれる二つのタイプの唯識観行(cf. 拙稿[1992],p.63注32)のうち、「影像の相の除遣→本来的なものの相の除遣」という唯識観行の過程とは逆の方向を示すものであり、また所謂「入無相方便相」と称される唯識観行の「客体の非存在を悟り、主体の非存在をも悟って、その後に、主体・客体の非認識を体得する」という構造とも一致しない。

¹⁸ “/rab 'byor gal te mos par bya ba'i gzugs las mos pa'i gzugs kyi mtshan nyid gud na yod na ni” (D.114b3; P.154a6), 「須菩提。若於色中能所信解有異相者」 (T 8,p.860a7-8)

チベット訳からすれば勝解としての色の特相が独自にはないことを述べるかのような文章であるが、文意からすれば、以下はまず勝解対象としての色が勝解としての色とは別個に存在しないことを知り、勝解対象としての色に関する想念を除遣すべきことを説く。そこでPŚはもし勝解対象としての色、つまり壺などの瞑想対象が独自の特相を持つとすれば四種の不合理があることを指摘してゆくのであるが、その記述はMS,II.14 A Bなどに見られる唯識無境の証明に依拠したものと考えられる。いさか長くなるが、比較のために、長尾雅人博士によるMS,II.14 Aの和訳を引用する(『撰大乘論 和訳と注解 上』講談社,1982,pp.315-317)。

「物が〔眼の前に〕現れて見えているにもかかわらず、それが無であることを、如何にして知るのか。一世尊が〔経の中で〕次のように述べておられる。すなわち、“菩薩に四つの性質が具わるとき、彼はすべての表象において外界は非存在であることを明瞭に理解する。〔四つの性質とは、次の四種の知である。〕(1)〔外界の〕相は、相互に矛盾した色を生起せしめるとの知。例えば餓鬼や動物や人間や神々によって、同一の事物の上に別別の表象が見られるが如きである。(2)認識される対象が無くても表象は得られる〔との知〕。例えば過去や未来や夢や映像〔などの現に実在でないものの表象〕が得られる如きをいう。(3)努力をしない

『五百頌般若経』について (藤田)

種々の勝解を持つ有情達が、同等地に、見解を異にすることなく認識することになろう

¹⁹。(2)夢等^fにおいて認識対象の無い勝解^gによって〔対象を〕認識することもなくなろう。(3)愚かな凡夫達でさえ色について真実を見る^hことになろう。(4)無分別の勝解の成就ⁱ、道理^jに対しても、勝解対象としての色が対応^kしないことなるはずである

ままで、倒錯なきこととなろう、との知。例えば、もし外界が実在ならば、その外界を認識する識は、倒錯なきものということになろう。努力を要せずして真実を見ているのだからである。(4)〔対象が〕三種の知に対応するとの知。例えば(a)心が自在となることを得た菩薩や禅定者たちにおいては、〔彼等の〕意欲の力によって、それら外界がその〔欲した〕よう現れる。(b)心の静寂(止)を得た修行者が、〔經典などの〕法の観察(観)に努めるときは、ただ思考を集中しただけで、対象が現れる。(c)すでに無分別智を獲得した人々、またその中にある人々にとっては、外界の対象はすべて現れることがない”と。

このようにして、外界の対象が三種の智に対応すること、およびそれに先立って説いた三種の理由によって、外界の非存在が立証されるのである。」

このようにMSが経句を引用して説く四種の根拠からなる唯識無境の論証は、他に『成唯識論』卷7(T 31,p.39a8-23)、『三性論』k.35にも説かれていることが知られている。また前者は「契經説」としてこれを紹介するものであるが、『成唯識論述記』はその「契經」を『阿毘達磨經』としているという(cf.長尾上掲書,p.319(注1,2))。以下のPSの記述がこれらの瑜伽論書の記述を前提とすることは確実であろう。ただし、PSの場合は、勝解対象としての色等が固有の特相をもっていないことを論証する根拠として上の四種を挙げるのであり、外界の非存在性や唯識ということに全く言及していない点は注意される。つまりPSは瑜伽行派の唯識無境の説を熟知しているながら、唯識無境を説くことをあえて避けているとしか考えられない。この例からも、前稿(p.9)に触れたような、PSと瑜伽行派との微妙な立場の相違というものが窺われるよう。

¹⁹前注引用のMSに説かれる四種の性質の中の(1)に対応すると考えられる記述であるが、読解困難な部分なので、まず藏漢テクストを訂正しないままに提示する。

“(1)mos par bya ba la sems can mos pa tha dad pa rnams dang / mtshungs par ita ba tha dad par dmigs par ’gyur” (D.114b3; P.154a6)

「(1)即一切衆生種種信解。平等法中有差別相可見可得。」(T 8,p.860a7-9)

PSがなすべき主張は、もし勝解対象としての法(つまり瞑想の対象とされる外界の壺など)が瞑想者によって勝解された法(つまり心中に映し出された壺の影像)とは別個に独自の特相を有するならば、四種の矛盾がある。ゆえに勝解対象としての法に独自の特相はないのであり、またそのように知ることによって勝解対象としての法に関する概念を除遣すべきであるということである。上の文章は最初の矛盾を指摘するものであり、その主張は、「もし勝解対象としての法が独自の特相をもって存在するものとするならば、ある同一の勝解対象に対して有情達は常に等しい見解(drṣṭi)を持つことになるが、それは実例と矛盾する。例えば、同じ河の流れに対して、餓鬼は膚に満ちた飲み得ないものと認識し人間は清らかな飲料水等と認識するというように、有情達はそれぞれに異なった認識をする。ゆえに勝解されたものとしての法とは別個に勝解対象としての法が独自にあるわけではない」というものでなければならないと考えられる。しかし上の藏訳テクストのままではそのようには読めないと判断し、漢訳の支持を得ることはできないが、和訳に際しては藏訳テクスト太字部 “tha dad par” を “tha dad med par” に訂正して読んだ。

インド学チベット学研究 1

²⁰ しかしスプーティよ、そのように(1)【ある同一の】勝解対象について、種々の勝解を持つ有情達が、同時に、見解を異にすることなく²¹認識することはないし、(2)夢等においても認識対象の無い勝解は認識される。また(3)愚かな凡夫[P.154b]達が色について真実を見ることはないし、(4)無分別の勝解の成就、道理に対しても勝解対象としての色は対応する。それゆえ菩薩は、勝解されたものとしての色とは別に勝解対象としての色の特相は無いと見るべきである。また他に¹、その勝解対象としての色のままに、形相を伴った見²²として勝解されたものとしての色も生起する²³という〔考え〕は排除される²⁴。それゆえに別の対象²⁵が顕現する²⁶のである²⁷。

このように見て菩薩は勝解対象としての色に関する想念²⁸を除遣する²⁹のである。〔さらに〕彼は次のように考える—勝解対象としての色が有るとき勝解されたものとしての色を知るのであるが、[D.115a]〔勝解対象としての色が〕無いならば〔勝解されたものとしての色を知ることは〕ないと知って、色について迷惑した心³⁰を認識するのであり、勝解されたものとしての色に関する想念²⁸も除遣するのである。彼は二つの色に関する想念を除遣し、色に関するあらゆる想念を除遣してから、あらゆる色を認識しない。あらゆる色を認識しないことによって色を迷惑であると認識する。色を迷惑で

²⁰ これも読解困難な文章なので、まず藏漢テクストを提示する。“rnam par mi rtog pa'i mos pa grub pa / rigs pa la yang mos par bya ba'i gzugs rjes su 'jug par mi 'gyur pa zhig” (D.114b4; P.154a7-8)
「不與無分別信解如理相應」(T 8.p.860a10-11)

筆者にはこの文章の全体の意味が充分に理解できていないが、特に理解困難な点は、「無分別の勝解の成就(rnam par mi rtog pa'i mos pa grub pa)」および「道理(rigs pa)」という語の意味と、この二つの語の間の関係である。後者“rigs pa”については種々の語義が考えられようが、漢訳の「如理」の語がこれに対応するとすれば、その原語はyukti等の \sqrt{yuj} の派生語と考えられるので、「道理」と和訳した。しかしどもあれ、このPŚの文章は、注(18)引用のMS,II,14 Aに対する和訳の(4)の部分に相当するらしい。なぜならPŚの文章の中に見られる「対応(rjes su 'jug pa,anuvṛtti)」の語は、MS,II,14 Aの(4)における「〔対象が〕三種の智に対応する(rjes su mthun pa,anuvṛtti)」という記述との関連を示すと思われるからである。もし勝解対象としての色が独自の特相を有するならば、勝解対象としての色が「道理」(MSのいう三種の智に相当するか)に対応しないことになろう、というのがPŚの主張かと思われる。

²¹ D, Pともに“tha dad par”であるが、“tha dad med par”と読む。注(19)参照。

²² “/ gzhan du na mos par bya ba'i gzugs de ji lta ba bzhin du mtshan ma dang bcas pa'i lta ba'i mos pa'i gzugs kyang yang dag par byung ba ni ma gtogs so // de bas na don gzhan snang ngo /” (D.114b6-7; P.154b2-3)

『五百頌般若経』について(藤田)

あると認識することによって色に対する迷乱の原因を認識する。色に対する迷乱の原因を認識することによって色について迷乱のない法^aを証得する^w。色について迷乱のない法を証得することによって色について迷乱のない等流法^xを証得する。〔このようにして〕彼によって色についての迷乱と迷乱のない法がまず証得されるのである。〔そして〕彼は色についての迷乱のない法と迷乱のない等流法にもとづいてあらゆる仏陀の特質^yを修習し、また有情達を成熟[P.155a]し、仏国土^zを浄め、すみやかに無上正等覚をさとるのである。

菩薩が色についてこのように説くならば、〔彼は〕正しく説く者である。…[D.115b][P.155b] [D.116a]…

(a)mnyam par gzhag par 'dod, 欲住平等界中!, samādhātukāma. (b)mos par bya ba'i gzugs, 所信解色, adhimuktavya-rūpa. (c)mos pa'i gzugs, 能信解色, adhimukti-rūpa. (d)yang dag pa ma yin par ston pa. (e)mtshan nyid, lakṣaṇa. (f)rmi lam la sogs pa, svapnādi. (g)dmigs pa med pa'i mos pa, 無所縁信解, asadālambana-adhimukti. (h)de kho na mthong ba, tattvadarśin. (i)rnam par mi rtog pa'i mos pa grub pa, nirvikalpa-adhimukti-siddha. (j)rigs pa, 如理. (k)rjes su 'jug pa, 相應, anuvṛtti. (l)gzhan du na, anyathā, itarathā. (m)mtshan ma dang bcas pa'i lta ba, sanimittadrṣṭi. (n)yang dag par byung ba. (o)ma gtogs. (p)don gzhan, anya-artha. (q)snang, pratibhāsate. (r)mos par bya ba'i gzugs kyi 'du shes, adhimoktavyarūpa-samjñā. (s)rnam par 'jig, vibhāvayati. (t)'khrul pa'i sems, bhrāntacitta. (u)mos pa'i gzugs kyi 'du shes, adhimuktirūpa-samjñā. (v)'khrul pa med pa'i chos, abhrānta-dharma. (w)yang dag par sgrub, samudāgacchati. (x)'khrul pa med pa'i rgyu 'thun pa'i chos, abhrānta-nisyanda-dharma. (y)sangs rgyas kyi chos, buddhadharma. (z)sangs rgyas kyi zhing, buddhaksetra.

[§16]スブーティよ、菩薩は色について、[P.156a]【1】正法を授けるという慈愛^aと【2】世間的な安樂を授けるという慈愛^bと【3】出世間的な安樂を授けるという慈愛^cと【4】慈愛^dと【5】大いなる慈愛^eとの五種の慈愛を修習すべきである。…

スブーティよ、菩薩は色について、【1】執われない悲愍^fと【2】和合するという悲愍^gと【3】離れるという悲愍^hと【4】悲愍ⁱと【5】大いなる悲愍^jとの五種の悲愍を修習すべきである。…[D.116b]…

スブーティよ、菩薩は色について、【1】〔他者が〕正法を信ずることによって潤い恩益を受けることに隨喜すること^kと【2】〔他者が〕世間的な安樂によって潤い恩益を受

インド学チベット学研究 1

けることに隨喜すること^lと【3】〔他者が〕出世間的な安樂によって潤い恩恵を受けることに隨喜すること^mと【4】喜ⁿと【5】大いなる喜^oとの五種の喜を修習すべきである。…[P.156b]…

スブーティよ、菩薩は色について、【1】悪見と雜染を無くする努力に対する平静心^pと【2】あらゆる過失を断じることと雜染を無くする努力に対する平静心^qと【3】すべての功德を集めることと雜染を無くする努力に対する平静心^rと【4】平静心^sと【5】大いなる平静心^tとの五種の平静心を修習すべきである。…[D.117a]…

(a)dam pa'i chos nye bar bsgrub pa'i byams pa, 摄受正法慈, saddharma-upasamhāra-maitrī. (b)'jig rten pa'i bde ba nye bar bsgrub pa'i byams pa, 摄受世間諸樂慈, laukikasukha-upasamhāra-maitrī. (c)'jig rten las 'das pa'i bde ba nye bar bsgrub pa'i byams pa, 摄受出世勝妙樂慈, lokottarasukha-upasamhāra-maitrī. (d)byams pa, 慈, maitrī. (e)byams pa chen po, 大慈, mahāmaitrī. (f)mi sdud pa'i snying rje, 無取著悲. (g)'du ba'i snying rje, 和合悲. (h)'bral ba'i snying rje, 離散悲. (i)snying rje, 悲, karunā. (j)snying rje chen po, 大悲, mahākarunā. (k)dam pa'i chos la dad pas brlan pa dang phan 'dogs pa dang rjes su yi rang ba'i dga' ba, 正法清淨不壞隨喜攝受喜. (l)'jig rten pa'i bde bas brlan pa dang phan 'dogs pa dang rjes su yi rang ba'i dga' ba, 世間諸樂不壞隨喜攝受喜. (m)'jig rten las 'das pa'i bde bas brlan pa dang phan 'dogs pa dang rjes su yi rang ba'i dga' ba, 出世妙樂不壞隨喜攝受喜. (n)dga' ba, 喜, muditā. (o)dga' ba chen po, 大喜, mahāmuditā. (p)lta ba ngan pa dang kun nas nyon mongs pa med pa brtul ba'i btang snyoms, 罷除諸不正見及諸雜染捨. (q)nyes pa thams cad yongs su spang ba dang kun nas nyon mongs pa med pa²³ brtul ba'i btang snyoms, 遠離一切過失罣除諸雜染捨. (r)yon tan thams cad yongs su bsdu ba dang kun nas nyon mongs pa med pa(D.pa'i) brtul ba'i btang snyoms, 摄聚一切功德罣除諸雜染捨. (s)btang snyoms, 捨, upeksā. (t)btang snyoms chen po, 大捨, mahopeksā.

[§ 17] スブーティよ、菩薩は布施波羅蜜を行じることによって、色について【1】誓約の布施^aと【2】財と畏れないことを与える布施^bと【3】法を与える布施^cと【4】布施^dと【5】大いなる布施^eとの五種の布施を修習すべきである²⁴。…

²³D. P. とも “med pa” を欠くが、受～識に関する再説部分にはD. P. ともに “med pa” がある。再説部分の読みに従う。

²⁴本節では六波羅蜜のそれぞれが五種に分類されるが、その一部は瑜伽行派における六波羅蜜をそれぞれ三種に分類したものと共通する。六波羅蜜を各三種に分類する瑜伽行派の典籍については長尾雅人『摄大乘論 和訳と注解 下』pp.144-145注1に、『摄大乘論』IV.9の他、『菩薩地』(施品～慧品)、『瑜伽論』摄決择分(T 30,p.731b = 『解深密經』地波羅蜜品(T 16,p.705c; S N S, IX, 12))、『莊嚴論』第XVI章、『阿毘達磨雜集論』(T 31.,749c; A S B h, § 131F)、『成唯識論』卷9(T 31,p.51b)が挙げられる。但し長尾博士が指摘されるように、瑜伽行派の各典籍においても六波羅蜜それぞれの分類の内容等が異なる部分がある。

その中でまず布施波羅蜜に関しては、瑜伽行派では共通して「法施(dharma-dāna)・財施(āmisa-d.)・無畏施(abhaya-d.)」の三種が説かれる(cf.『菩薩地』施品(T 30,p.508c; B B h, p.129.9)、M S A, XVI.18.

『五百頌般若経』について（藤田）

スブーティよ、菩薩は戒波羅蜜を行じることによって、色について【1】受持[P.157a]と言語協約を伴った律儀戒^fと【2】静慮についての律儀戒^gと【3】無漏の律儀戒^hと【4】戒ⁱと【5】大いなる戒^jとの五種の戒を修習すべきである²⁵。…

スブーティよ、菩薩は忍波羅蜜を行じることによって、色について【1】有情から害を与えるても耐えるという忍^kと【2】苦を忍んで受けるという忍^lと【3】法を深く考察するという忍^mと【4】忍ⁿと【5】大いなる忍^oとの五種の忍を修習すべきである

MS A B h ad M S A,XVI.52)。ただし『莊嚴論』(MS A B h ad M S A,XVI.52)、『阿毘達磨雜集論』、『成唯識論』では「財施・無畏施・法施」の順序で列挙される。こういった瑜伽行派の布施波羅蜜に関する「財施・無畏施・法施」の分類が、P Ś の布施波羅蜜の五種の分類のうちの【2】【3】として反映されていることが知られる。

²⁵瑜伽行派における戒の分類としては、「律儀戒(samvara-śīla)・攝善法戒(kuśaladharmaśamgrāhaka-ś.)・饒益有情戒(sattvārthakriyā-ś.)」の三種が著名であり、『菩薩地』戒品(T 30p.511a; B B h, p.138.21-23)、MS A B h ad M S A,XVI.37、『阿毘達磨雜集論』上掲箇所、『授大乘論』IV.9, VI.2、『成唯識論』上掲箇所に出る。また『瑜伽論』撰決択分上掲箇所(=S N S, IX.12)には「轉捨不善戒・轉生善戒・轉生饒益有情戒」の三種が説かれるが、P Ś における【1】～【3】の戒の分類は律儀戒を三種に分類するもので、これらの大乗的な戒の分類とは異なっている。

P Ś の【1】～【3】と同様の分類はむしろ、本来有部論書においてしばしば説かれたものようであり、『婆沙論』(T 27,pp.84a,621c,622b,642c,643c-644a)には「別解脱律儀・靜慮律儀・無漏律儀」の三種あるいはこれらに「斷律儀」を加えた四種の律儀の分類が見られる。この三種の分類は『俱舍論』業品(IV.13,35,44)にもあり、例えばIV.13 では次のように説かれる。

“trividhaḥ samvarah / prātimokṣasamvara ihatyānāṁ kāmāvacaram sīlam /
dhyānasamvara rūpāvacaram sīlam / anāsravasamvara 'nāsravam sīlam / ”「律儀
は三種である。[即ち] 別解脱律儀はこの〔欲界の〕者達の、欲界繋の戒である。靜慮律儀は
色界繋の戒である。無漏律儀は無漏の戒である。」(AKB h,p.205.16-17)

こういった界の区別にもとづく律儀の阿毘達磨の分類は『瑜伽論』(T 30,pp.643c,757b-c(cf.『顯揚聖教論』T 31,p.542c))や以下に引用するM S A,XVI.20ab といった瑜伽論書にも説かれるが、P Ś が別解脱律儀を言語協約つまり言葉によって制定された律儀戒と表現している点は、特に後者との関連を示唆させるようである。

M S A,XVI.20ab: “saṃketadharmatālabdhāḥ saṃvarastheśu vidyate /”「律儀に
住する者達においては、言語協約と法性とによって得られる〔戒〕がある。」

M S A B h (p.105.3-4): “tatra saṃketalabdhāḥ prātimokṣasamvaraśamgrāhitāḥ /
dharmatāpratilabdhāḥ dhyānānāsravasamvaraśamgrāhitāḥ / ”「その中で、言語協約に
よって得られる〔戒〕とは別解脱律儀として包摂されるものであり、法性によって得られる
〔戒〕とは静慮と無漏の律儀として包摂されるものである。」

インド学チベット学研究 1

²⁶ 。…[D.117b]…

スプーティよ、菩薩は精進波羅蜜を行じることによって、色について【1】〔教法を〕教示し朗読し思念することについての精進^aと【2】あらゆる過失を断じることについての精進^aと【3】あらゆる功德を集めることについての精進^aと【4】精進^aと【5】大いなる精進^aとの五種の精進を修習すべきである²⁷。…[P.157b]…

スプーティよ、菩薩は禪定波羅蜜を行じることによって、色について【1】文字を顧慮した善き禪定^aと【2】文字に顧慮しない本来清浄なる善き世間的禪定^aと【3】出世間の禪定^aと【4】禪定^aと【5】大いなる禪定^aとの五種の禪定を修習すべきである²⁸。…[D.118a]…

スプーティよ、菩薩は智慧波羅蜜を行じることによって、色について【1】文字を顧慮した禪定にもとづく智慧^aと【2】文字を顧慮しない本来清浄なる善き世間的禪定にもとづく智慧^a’と【3】出世間の禪定にもとづく智慧^b’と【4】智慧^c’と【5】大いなる智慧^d’との五種の智慧を修習すべきである²⁹。…[P.158a]…

²⁶ 「耐怨害忍・安受苦忍・諦察法忍」の三種は上掲の瑜伽論書のすべてに共通して説かれる(cf.『菩薩地』忍品(T 30,p.523b; B B h,p.189.9-11、M S A B h ad M S A,XVI.22)。

²⁷ 瑜伽論書では精進に関して、「摸甲精進/被甲精進(samnāha-vīrya)・攝善法精進/攝善精進(kuśaladharmaśamgrāhaka-v.)・饒益有情精進/利樂精進(sattvārthakriyā-v.)」(『菩薩地』T 30,p.525c; B B h,p.200.10-11、『成唯識論』)と分類する例、第二を攝善法精進にかえて「轉生善法加行精進」(『瑜伽論』T 30,p.731b=S N S,IX,12)あるいは「加行精進(prayoga-v.)」とする分類(『雜集論』)、「被甲精進・加行精進・無怯弱無退転無喜足精進(alīna-akṣobhya-asamtuṣṭi-v.)」の三種を説く分類(M S A,XVI.68、M S,IV.9)が見られるが、P Sの分類はいずれのものとも一致しない。

²⁸ この禪定に関する分類もP S独自のものであろう。瑜伽論書においても禪定に関する分類は一定していない。「現法樂住靜慮(dṛṣṭadharmaśukhavihārāya dhyānam)・能引菩薩等持功德靜慮(bodhisattvasamādhiguṇanirhārāya dhyānam)・饒益有情靜慮(sattvārthakriyāyai dhyānam)」(『菩薩地』T 30,p.527c; B B h,p.207.10-12)、「無分別寂靜極寂靜無罪故對治煩惱衆苦樂住靜慮・引發功德靜慮・引發饒益有情靜慮」(『瑜伽論』T 30,p.731b=S N S,IX.12)「現法樂住靜慮(dṛṣṭadharmaśukhā(sic.)vihārāya dhyānam)・引發神通靜慮(abhijñānirhārāya dhyānam)・饒益有情靜慮(sattvārthakriyāyai dhyānam)」(『雜集論』)、「安住靜慮・引發靜慮・成所作事靜慮」(M S,IV.9)、「安住靜慮・引發靜慮・辦事靜慮」(『成唯識論』)。

²⁹ この智慧に関する分類は上の禪定の分類に関連するものであり、したがってこれもP S独自の解釈である。なお瑜伽論書における智慧の分類は以下のようである。「能於所知眞實隨覺通達慧(jñeyetattvānubodhaprativedhāya)・能於如說五明處及三聚中決定善巧慧(pāmcasu ca yathānirdiṣṭeṣu

『五百頌般若經』について(藤田)

(a)dam bcas pa'i sbyin, 誓願施, pratijñā-dāna. (b)zang zing dang mi 'jigs pa bsgrub pa'i sbyin pa, 財及無畏施. (c)chos bsgrub pa'i sbyin pa, 法施. (d)sbyin pa, 施, dāna. (e)sbyin pa chen po, 大施, mahādāna. (f)yang dag par blangs pa dang brda can gyi sdom pa'i tshul khrims, 饒益有情戒!. (g)bsam gtan gyi sdom pa'i tshul khrims, 定法戒, dhyānasamvaraśīla. (h)zag pa med pa'i sdom pa'i tshul khrims, 無漏法戒, anāsravasamvaraśīla. (i)tshul khrims, 戒, śīla. (j)tshul khrims chen po, 大戒, mahāśīla. (k)sems can gnod pa byed pa la ji mi snyam pa'i bzod pa, sattvāpakāramarṣaṇaksānti, 耐怨害忍. (l)sdug bsngal dang du len pa'i bzod pa, duḥkhādhivāsanakṣānti, 安受苦忍. (m)chos la nges par sems pa'i bzod pa, dharmānidhyānakṣānti, 諦察法忍. (n)bzod pa, 忍, kṣānti. (o)bzod pa chen po, 大忍, mahākṣānti. (p)lung nod pa dang kha ton bya ba sems pa'i brtson 'grus, 解說讀誦思惟精進. (q)nyes pa thams cad yongs su spang ba'i brtson 'grus, 遠離一切過失精進. (r)yon tan thams cad yongs su bsdu ba'i brtson 'grus, 攝聚一切功德精進. (s)brtson 'grus, 精進, vīrya. (t)brtson 'grus chen po, 大精進, mahāvīrya. (u)tshig 'bru la ltos pa'i dge ba'i bsam gtan, 善解不離文字定, vyañjanāpeksakuśaladhyāna. (v)tshig 'bru la mi ltos pa'i dge ba gdod ma nas dag pa'i 'jig rten pa'i bsam gtan, 善離文字最初清淨世間定. (w)'jig rten las 'das pa'i bsam gtan, 出世間定, lokottaradhyāna. (x)bsam gtan, 定, dhyāna. (y)bsam gtan chen po, 大定, mahādhyāna. (z)tshig 'bru la ltos pa'i bsam gtan la brten pa'i shes rab, 善解不離文字定所依止慧, vyañjanāpeksadhyānāśrita-prajñā. (a')tshig 'bru la mi ltos pa'i dge ba gdod ma nas dag pa'i 'jig rten pa'i bsam gtan la brten pa'i shes rab, 善離文字最初清淨世間定所依止慧. (b')'jig rten las 'das pa'i bsam gtan la brten pa'i shes rab, 出世間定所依止慧, lokottaradhyānāśrita-prajñā. (c')shes rab, 慧, prajñā. (e')shes rab chen po, 大慧, mahāprajñā.

[§18]スブーティよ、善知識に親近することを備えた^a菩薩は、【1】聴聞による親近^bと【2】奉事と奉仕と学の規定に従った親近^cと【3】大いに努力して喜ばせることによる親近^dと【4】親近^eと【5】大いなる親近^fとの五種の善知識に対する親近によって、色において善知識に親近るべきである。…このように善知識に親近した菩薩は解脱の手だて^gを取得^hし、また大いなる福徳を起こしてⁱ[D.118b]すみやかに無上正等覚において出離するであろう。

(a)dge ba'i bshes gnyen la bsten pa dang ldan pa, 親近善知識, kalyānamitrasevāyukta. (b)mnyan pas bsten pa, 聽受親近, śravanasevā. (c)bsnyen bkur bya ba dang yongs su spayd pa dang bslab pa'i cho ga dang mthun pas bsten pa, 承事作用學法親近, paryupāsanaparicaryāśiksāvidhyānukūla-sevā. (d)nan tan gyis mgu bar bya bas bsten pa, 修行進向親近. (e)bsten pa, 親近, sevā. (f)bsten pa chen po, 大親近, mahāsevā. (g)rnam par thar ba'i thabs, vimokṣa-upāya. (h)yongs su 'dzin. (i)rab tu bskyed(P.skyed), prabhāvayati.

vidyāsthāneśu triṣu ca rāsiṣu kauśalyakriyāyai)・能作一切有情義利慧(sattvārthakriyāyai)」(『菩薩地』T 30,p.528c; B B h.,p.212.10-12)、「縁世俗諦慧・縁勝義諦慧・縁饒益有情慧」(『瑜伽論』T 30,p.731b=S N S,IX.12)、「縁世俗慧(samvṛtyālambanā)・縁勝義慧(paramārthālambanā)・縁有情慧(sattvārthālambanā)」(『雜集論』)、「無分別加行慧・無分別慧・無分別後得慧」(M S)、「生空無分別慧・法空無分別慧・俱空無分別慧」(『成唯識論』)。

インド学チベット学研究 1

[§ 19] スブーティよ、如来を供養すること^aに勤しむ^b菩薩は、【1】種々の讚嘆を供えるという供養^cと【2】利養と恭敬を供えるという供養^{d³⁰}と【3】大いに努力することによって喜ばせるという供養^eと【4】供養^fと【5】大いなる供養^gとの五種の供養によって、色において如来を供養すべきである。…[P.158b]…このように如来を供養することに勤しむ菩薩を、十方の無辺の世間界にまします仏世尊達は称讃され、また天・人・アスラを含む世間から利養と恭敬を得るであろう。また無量の有情達を成熟し、仏国土を浄め、すみやかに無上正等覚をさとるであろう。

(a)de bzhin gshegs pa la mchod pa, tathāgatapūjā. (b)brtson pa. (c)bstod pa sna tshogs nye bar bsgrub pa'i mchod pa, 種種讚歎恭信供養, nānāstutuyupasam̄hāra-pūjā. (d)'thob pa dang bkur sti nye bar bsgrub pa'i mchod pa, 以清淨利養恭信供養, lābhasatkāropasam̄hāra-pūjā. (e)nan tan gyis mynes par bya ba'i mchod pa, 修行進向供養. (f)mchod pa, 供養, pūjā. (g)mchod pa chen po, 大供養, mahāpūjā.

[§ 20] スブーティよ、布施波羅蜜を備えた^a菩薩が、もし色について形相を伴った布施^bを修習するならば、〔彼は〕すみやかに布施波羅蜜を完成することはない。〔しかし〕形相のない布施^cを修習するならば、すみやかに布施波羅蜜を完成するであろう。スブーティよ、どのようにして菩薩は色について形相を伴った〔布施〕や形相のない布施を修習するのか。スブーティよ、もし菩薩が色に関して布施を勝解するとき、勝解対象としての布施^dや勝解されたものとしての布施^eを認識するならば、[D.119a] 菩薩は色に関して形相を伴った布施を修習していると知るべきである。スブーティよ、もし菩薩が色において布施を勝解するとき、色を自性として認識することがなく^f、そのような存在として認識することなく^g、[P.159a] 本来的に認識することがない^h〔という三種のあり方で認識しないこと〕によって勝解対象としての布施を認識せず、勝解されたものとしての布施も認識しないならば、菩薩は色に関して形相を離れた布施を

³⁰ 利養(lābha)の供養とは物を与えることによる供養であり、恭敬(satkāra)の供養とは尊敬の行為をもつて供養することである。これらについてはMAV,II.3,10, MSA, XI.64,XII.9,XVII.6-7,66などに出る。例えばMSA,XVII.6-7に対するS A V B h (D.Tsi 50a4-5; P.Tsi 58b7-8)には、「利養とは法衣(chos gos)やベッド(mal cha)などを献上することであり、恭敬とは敬礼(phyag bya ba)や合掌(thal mo sbyor ba)や…讚嘆すること(bstod pa byed pa)などである」と説明される。

『五百頌般若経』について(藤田)

修習していると知るべきである³¹。…

[布施波羅蜜に関する以上の事柄を] 戒・忍・精進・禪定・智慧についても同様に適用すべきである³²。

(a)sbyin pa'i pha rol tu phyin pa dang ldan pa, 能與布施波羅蜜多如理相應, dānapāramitā-yukta. (b)mtshan ma dang bcas pa'i sbyin pa, 有相施, sanimitta-dāna. (c)mtshan ma med pa'i sbyin pa, 無相施, animitta-dāna. (d)mos par bya ba'i sbyin pa, 所解脱布施!, adhimoktavya-dāna. (e)mos pa'i sbyin pa, 能解脱布施!, adhimukti-dāna. (f)ngo bo nyid kyis dmigs su med pa, svabhāva-anupalambha. (g)de ltar dngos bo dmigs su med pa, tathābhāva-anupalambha. (h)rang bzhin gyis dmigs su med pa, prakṛty-anupalambha. (i)sbyar bar bya, yojyam.

[§21]³³ スブーティよ、菩薩は色について空三昧^aを遍知すべきである^b。スブーティよ、色[P.159b]について、【1】非存在の

³¹ §20は六波羅蜜の完成ということを、§15などと同じ文脈で説いているものと考えられる。すなわち、§15は諸法を瞑想において観察する場合、勝解対象(adhimoktavya)と勝解されたもの(adhimukti)つまり心中に描き出されたイメージという二つのものをそれぞれ別個の特相あるものとして捉えることを否定し、これらの二つに関する想念(samjnā)を除遣することによって諸法を認識しないことを説いていた。これに対して本節は、瞑想において dāna(この場合は布施の行為というよりも施物と考えるべきか)をイメージするとき、勝解対象としての布施(物)と勝解されたものとしての布施(物)の二を認識するあり方を形相を伴った(sanimitta)布施の修習として否定し、svabhāva-anupalambha等の三種のあり方で認識しないことにもとづく形相を離れた(nirnimitta)布施の修習を説くのである。想念と形相とは「想念とは〔認識対象〕の形相を把握することである(samjnā nimittodgrahaṇātmikā; AKB h,p.10.15)」という関係にあるものであるから、想念を除遣することと、認識対象の形相を把握しないでそれから離れることは一体の関係にあるといえよう。

SNS第VIII章(玄奘訳「分別瑜伽品」)によれば、人間には諸法を実体的に捉えようとする認識論的な束縛があり、これを「相縛(nimitta-bandhana)」と称する。修行者はあらゆる認識対象の形相について、それは唯だ識にすぎない(vijñaptimātra)と観想し、形相を除遣する(nimitta-vibhāvanā)ことによって相縛から解放されるとされる。PŚ § 20は、このような瑜伽行派でいう「相縛」からの解脱を説くものである。ただしSNSが形相を除遣するのに唯識観を採用しているのに対して、PŚは§15の場合と同様、本節においても唯識ということに全く触れない。かわりに形相から離れる(それはすなわち形相の除遣を意味するであろう)手立てとして、三種のあり方での非認識を説くのみである。なお、この三種の非認識は直後の§21所説の三種の空性と関連し、さらに§2所説の非存在・悪存在・実存在の三分説と関連することは明らかである。本節は形相から離れること、つまり相縛からの解脱と三分説(三性説)とを明確に関連づけている記述として注意されよう。

³²前稿pp.4,7(注記7)に指摘したように、チベット訳がこのように戒ないし智慧波羅蜜に関する記述を省略するのに対し、漢訳(T 8,p.862b7-p.863c最終行)は一々を詳しく説いている。

³³PŚが§21の三三昧に関する記述において瑜伽行派の空性説として著名な三種空性を説いていることについては、前稿pp.7-8を参照。

インド学チベット学研究 1

空性^cと【2】そのように存在するものの空性^dと【3】本来的な空性^eを観て^f[D.119b]、心を一点に集中していること^g、これが空三昧である。菩薩はこのように色について空三昧を遍知すべきである。…

スブーティよ、菩薩は色について無相三昧^hを遍知すべきである。スブーティよ、色についての無相三昧とは何か。スブーティよ、菩薩が色について、色は【1】非存在の空性と【2】そのように存在するものの空性と【3】本来的な空性のものであるとこのように作意して、色について【1】存在の形相ⁱを滅して^j非存在の形相に随伴する識^kも離れ^l、【2】そのように存在するものの形相に随伴する識^mを離れ、【3】存在と非存在の形相に随伴する識ⁿをも離れて、心を一点に集中していること、これがスブーティよ、色についての無相三昧である。菩薩はこのように色について無相[P.160a]三昧を遍知すべきである。…[D.120a]…

スブーティよ、菩薩は色について無願三昧^oを遍知すべきである。スブーティよ、色についての無願三昧とは何か。色について、空〔三昧〕と無相三昧を体得した者が、色について【1】非存在の形相と相応しない認識対象^pと、【2】そのように存在しないものの形相と相応しない認識対象^qと、【3】存在と非存在の形相と相応しない認識対象^rについて心を一点に集中すること、これがスブーティよ、色についての無願[P.160b]三昧である。スブーティよ、菩薩はこのように色について無願三昧を遍知すべきである。…

(a)stong pa nyid kyi ting nge 'dzin, śūnyatāsamādhi. (b)yongs su shes par bya, pariññeya. (c)dngos po med pa stong pa nyid, abhāvaśūnyatā. (d)de ltar dngos po stong pa nyid, tathābhāvaśūnyatā. (e)rang bzhin stong pa nyid, prakṛti-śūnyatā. (f)dmigs nas, ālambya. (g)sems rtse gcig tu byed pa, 心一境性, cittaikāgratā. (h)mtshan ma med pa'i ting nge 'dzin, ānimittasamādhi. (i)dngos po'i mtshan ma, bhāva-nimitta. (j)'gags. (k)dngos po med pa'i mtshan ma'i rjes su 'brang ba'i rnam par shes pa, abhāvanimittānuvartanam vijñānam. (l)bral. (m)de ltar dngos po'i mtshan ma rjes su 'brang ba'i rnam par shes pa, tathābhāvanimittānuvartanam vijñānam. (n)dngos po dang dngos po med pa'i mtshan ma'i rjes su 'brang ba'i rnam par shes pa, bhāvābhāvanimittānuvartanam vijñānam. (o)smon pa med pa'i ting nge 'dzin, aprañihitasamādhi. (p)dngos po med pa'i mtshan ma dang mi 'thun pa'i dmigs pa, abhāvanimittapratikūlam ālambanam. (q)de ltar dngos po med pa'i mtshan ma dang mi 'thun pa'i dmigs pa, tathābhāvanimittapratikūlam ālambanam. (r)dngos po dang dngos po med pa'i mtshan ma dang mi 'thun pa'i dmigs pa, bhāvābhāvanimittapratikūlam ālambanam.

『五百頌般若經』について（藤田）

[§22]³⁴ スプーティよ、菩薩は色について【1】無いという意味^aと【2】滅するという意味^bと【3】有垢と無垢の意味^cとの三つの意味で無常性^dを遍知すべきである。
…[D.120b]…

スプーティよ、菩薩は色について【1】執著の意味^eと【2】三種の特相の意味^fと【3】関係の意味^gとの三つの意味で苦性^hを遍知すべきである³⁵。[P.161a]…

スプーティよ、菩薩は色について【1】存在しないという無我の意味ⁱと【2】そのように存在するという無我の意味^jと【3】本来的に無我であるという意味^kとの三つの意

³⁴P Śは四法印を三分説にもとづいて説いていると考えられるが、これについては、MA V,III.5-7を参照すべきである。MA V,III.5-7は三性説にもとづいて無常・苦・空・無我の四顛倒の真実(aviparyāsatattva)を述べる部分であり、まず無常に関しては次のように説かれる。

“trayo hi svabhāvā mūlatatvam / teṣu yathākramam asadartho hy anityārtha utpādavyārthah samalāmalatārthas ca.”

「實に根本真実とは三性である。それらおいて、順次、無常の意味が(三種)ある。(すなわち遍計所執性に関しては)無いという意味であり、(依他起性に関しては刹那剎那に)生じては滅するという意味であり、(円成実性に関しては、みずからが無常なのではなく、外からの來雜物によって)有垢であり(それ自身は)無垢であるという意味である。」(MA V B h,p.39.1-3. cf. MA V T,p.116.20-p.117.9)

P Śのいう無常性の三つの意味がこれと同趣意であることは明らかであろう。なおMS A第XVIII章菩提品はkk.77-79で三三昧を説き、統いてkk.80-81で四法摸頌(dharmoddāna)つまり四法印を説く。MS Aによれば四法摸頌は三三昧に拠って説かれるものであり、またそれは三性説と関連づけられる。このMS AおよびMA Vの関連部分を含め瑜伽行派の無常説については、早島理「無常と剎那—瑜伽行唯識学派を中心に」『南都佛教』59,1988.5,pp.1-48に綿密な考察がなされている。

³⁵前註指摘のように、MA V,III.6cdに同様の記述が見られる。III.6cdに対するMA V B hを以下に挙げておこう。

“mūlatatve yathākramam duhkham upādānataḥ pudgaladharmaṁbhiniveśopādānāt / laksāṇatas triduhkhatalakṣaṇatvāt / saṁbandhataś ca duhkhasambandhāt [/]"

「根本真実において、苦は順次〔三種である。即ち第一は遍計所執性を〕執受することによる〔苦〕である。個我と法とを執著することによって〔遍計所執性を実在として〕執受するからである。〔第二に依他起性は〕特相によって〔苦〕である。〔依他起性は苦苦性(duhkhaduhkhata)・壞苦性(vipariṇāmaduhkhata)・行苦性(saṁskaraduhkhata)の〕三つの苦性を特相とするからである。〔第三に円成実性は〕関係によって〔苦〕である。〔円成実性は依他起性の〕苦と関係するからである。(MA V B h,p.39.5-7. cf. MA V T,p.117.10-p.118.5)

インド学チベット学研究 1

味で無我性^lを遍知すべきである³⁶。…

スブーティよ、菩薩は色について【1】色の非存在が完全に寂靜とされたという意味^mと【2】そのようにには存在するものが寂靜とされたという意味ⁿと【3】本来的に清淨であることの寂靜の意味^oとの三つの意味で涅槃は寂靜であること^pを遍知すべきである。…—

(a)med pa'i don, asadartha. (b)rnam par 'jig pa'i don, vyayārtha. (c)dri ma dang bcas pa dang dri ma med pa'i don, samalāmalārtha. (d)mi rtag pa nyid, anityatā. (e)mngon par zhen pa'i don, abhinivesārtha. (f)mtshan nyid rnam pa gsum gyi don, trividhalakṣaṇārtha. (g)'brel pa'i don, sambandhārtha. (h)s dug bsngal nyid, duḥkhatā. (i)dngos po med pa bdag med pa'i don, abhāvanairātmyārtha. (j)de ltar dngos po bdag med pa'i don, tathābhāvanairātmyārtha. (k)ran bzhin bdag med pa'i don, prakṛtinairātmyārtha. (l)bdag med pa nyid, anātmatvā. (m)gzugs dngos po med pa shin tu zhi ba'i don, 色中無性畢竟寂靜義, rūpa-abhāvātyantaśāntārtha. (n)de ltar dngos po zhi ba'i don, tathābhāvaśāntārtha. (o)rang bzhin gyis rnam par dag pa zhi ba'i don, prakṛtivīśuddhaśāntārtha. (p)mya ngan las 'das pa zhi ba nyid, śāntanirvāṇatvā.

[§ 23] このように世尊がおっしゃられたとき^a、長老スブーティおよびこれらの比丘・比丘尼や男女の在俗の信者達^b、そして天・人・アスラ・ガンダルヴァを含む世間は^c心が歡喜し^d、世尊がお説きになられたことをほめ讃えた^e。

『聖五百頌般若經』終了。

(a)bcom ldan 'das kyis de skad ces bka' stsal nas, idam avocad bhagavān. (b)dge bsnyen dang dge bsnyen ma, upāsakopāsikāh. (c)lha dang mi dang lha ma yin dang dri zar bcas pa'i 'jig rten, sadevamānusāsuragandharvaś ca lokah. (d)yi rangs te, āttamanāh. (e)bcom ldan 'das kyis gsungs pa la mngon par bstod do, bhagavato bhāṣitam abhyanandan.

³⁶同じくMA V,III.7cd,8aに三種の無我が説かれ、内容的にはPSの三種の無我性と同じである。以下にそのB hを示そう。

“parikalpitasya svabhāvasya lakṣaṇam eva nāstīty alakṣaṇam evāsyā nairātmyam / paratantrasyāsti lakṣaṇam na tu yathā parikalpyata iti tadvilakṣaṇam asya lakṣaṇam nairātmyam / pariniṣpannas tu svabhāvo nairātmyam eveti prakṛtir evāsyā nairātmyam iti /”

「遍計所執性には特相そのものが無いから、これの無我は特相が無いことにはかならない。依他起性には特相は有るが、構想されたように有るわけではないから、それとは異なった特相であることがこれの無我的特相である。これに反して、圓成実性は無我そのものであるから、これの無我は本来的なものにはかならない。」(MA V B h,p.39.16-19. cf. MA VT,p.118.22-p.119.10)

『五百頌般若経』について (藤田)

[チベット訳コロフォン] 決定訳語によっても訂正され、確定された^a。

(a)skad gsar chad kyis kyang bcos nas gtan la phab pa.

キーワード 瑜伽行派, 般若経, 三性説